

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

### 歴史の波頭を求めて

「愛甲の古代を探る」を聞く

厚木市史編集専門委員会委員 鈴木靖民

今年（二〇一九年）五月十九日、厚木市教育委員会の主催で、あつき郷土博物館の開館を記念して、厚木市史シンポジウム「愛甲の古代を探る」が厚木市文化会館で開かれた。

この愛甲の古代のシンポジウムでは、愛甲郡と相模国の(1)古代の地域を動かす人々、(2)豪族の地域支配、(3)集落と生業・信仰、(4)支配拠点の成立の四つについて、十五名の研究者が集い、報告した。それぞれの題目と報告者は次の通りだった。

- (1) 日本古代の地域社会と民衆（宮瀧交二）  
古代相模をめぐる官人と交易（十川陽二）  
僧侶の都鄙間交流と地域仏教（藤本誠）  
出土文字資料にみる相模の社会（小林泰文）
- (2) 相模川流域の古墳・横穴墓と豪族（柏木善治）  
評・郡の編成と交通（荒井秀規）  
相模と愛甲の豪族―七〜十世紀（永井肇）  
相模と愛甲の豪族―十〜十二・十三世紀（松葉崇）
- (3) 里（郷）と拠点集落（大上周三）  
集落と生業・生産（押木弘己）  
地域の寺院と信仰のネットワーク（高橋香）
- (4) 郡家地域の構成―武蔵国南部地域（栗田一生）  
郡家地域の構成―相模国高座郡家（大村浩司）  
支配拠点の立地と景観（田尾誠敏）  
愛甲御屋敷添遺跡の再検討（西

川修一）

最前線の研究者が最新の研究を踏まえて、古代史のうねりのなかの波頭に迫ったと評してよいだろう（シンポジウムは、厚木市史古代通史編に関与する厚木市史編集専門委員会の古代史部会の委員が市教委文化財保護課と相談しながら、企画、実施した）。

### 1 古代国家と地域社会

その大きな一つは七世紀後半である。六四五年以降の各地の評制の設定、その上で六八三年の国制（国境の画定）、評・五十戸制の再編という古代国家が地域支配の一元化を目指すプロセスの実態、本質が、愛甲郡、相模国、武蔵国でもみえてきたといえる。その成果は学界内外に提示してよいと思われる。

七世紀後半の天武期頃、武蔵、相模では「諸岡五十戸」木簡、「大伴五十戸」瓦があるが、これらは王権、国家が各地域を領域規模で掌握し、人びとが生産物の貢納、労働の奉仕に携わることによりなり立っていた証拠である。だが、王権、国家と住民のどちらの側にも、五十戸の枠を定め、その

上の評に属する体制を維持するのは容易なことではなかった。

### 2 地方行政区画、評の設置と分割

この点で、田尾氏の提唱は極めて注目に値する。田尾氏は愛甲郡家、それに先立つ評家かとみられてきた石田付近の御屋敷添遺跡が、愛甲郡の南端、大住郡との郡境に位置することの地域支配拠点としての不自然さの克服を意図した。

相武国造が支配に当たった相模川流域の「相武」（相模）評を西岸の北の鮎河評（愛甲郡）と南の大住評の二つに分けることで二評が立てられた。東岸には高倉評を立てたとして、三評が設置されたという説を出したのである。また愛甲郡の中核を南の玉川郷に想定し、国、郡の公文書が各郷を回ってくる伝達経路も示した。これらは特に相模国府につながる相模川水系の交通と関係があると推測した。三評の設置は天武期の領域の編成であり、五十戸（のちの里）も同時となるだろう（なお評は朝鮮の地域呼称に同じ。その後の郡は中国の制、五十戸は中国の百戸の制に倣ったもの）。

一方、栗田氏は川崎市武蔵国橘樹郡家跡の西に接する影向寺下層遺跡出土の「无射志国荏原評」の瓦、七世紀後半の橘と荏原の二郡に共通する考古学的状況、同じ氏の分布、多磨、都筑、橘樹の錯綜する郡界に注意して、橘花屯倉から荏原、橘樹の二評へと分かれたことを推定した。橘樹郡には御宅郷（里）があった。

こうした七世紀末の評の設置時期に地域



鈴木 靖民 氏



の行政区画の再編があつたと思わせる例は、全国各地で推測されている。東国では、多磨郡の前に多上、多下の二評(郡)があつたことが瓦に刻まれた郡名によつて推定されている(深澤靖幸「武蔵国府・国分寺跡出土の「多上」「多下」の文字瓦をめぐる」『地域考古学の展開』)。屯倉から評、郡へと変わる場合でも、多氷(末)屯倉、横野に遺称名が伝わる横淳屯倉の二つの屯倉をもとにスムーズに二つの評、郡に移行しえない現実があつたことを示すと考えられる。こうした観点から推すと、武蔵国北部、武蔵国南西部には多磨郡に比べて遥かに小エリアの郡が多くある。下総国も小エリアの郡が多く、印波国造の「国」の分割説もある。武蔵国や甲斐国の郡にカミ、ナカ、シモノなどと名づけられるのは、評、郡の時に一つのエリアが分割されたことの反映だろう。八世紀初め、武蔵国で人間郡を割き高麗郡、新羅郡を置いて東国各地の渡来人を移住させた事実が知られている。

栗田氏は倉樹屯倉から久良岐、都筑の二評が立ったという考えも述べた。史資料に窺われる都筑と橘樹、橘樹と久良岐の関係の深さ、親縁性などは、もともと共通の社会であつたのが何かの都合で分けられた名残と解される。郡や評を立てるには、人びとを五十戸ごとに社会の基本単位とする必要がある、その後も支配継続のために住民を掌握、組織するたびに齟齬その他の問題が生じたのだろう。『播磨国風土記』には部から里になつた例がみえるが、里はもと五十戸であつた。(久良岐里(郷)の「諸岡五十戸」木簡は天武期であるが、貢納品の俵の表記が統一されず、また「田皮羅」と書かれており、人名もないことも留意される)。

田尾氏の説は、荒井氏が相模国の足柄評(郡)を、

内陸の東西の交通路を基準にして足上、足下二評(郡)に分けたことに始まる評の人的集団から転じて領域の把握を目的とし、国制下の郡につながる評に編成し直したとみたが、特に古くからの交通路と関連させる考えとも呼応する(荒井氏は愛甲郡の成立については田尾氏にすぐに同意しないが、愛甲郡からの移民により甲斐国都留郡相模郷ができたとする)。もしも御屋敷添遺跡が評家の一部であるとすれば、国造の「国」の相武評だけの頃の遺跡ということになる。地域の人びとの移動や生産物の貢上は収納先の評家、郡家と不可分であり、その立地、交通と大いに関係する。

### 3 壬生、屯倉から評の成立へ

相模国(相模川流域)には、八世紀、壬生直氏が多く存在するが、六世紀末、七世紀初め、厩戸皇子などが皇子養育のための経済基盤として各地に壬生を置き、そこに属する壬生部を設けたこととかわるであろう。また藤沢市の南鍛冶山遺跡出土の人面墨書土器の「大住郡三宅郷」の成立についても、屯倉との関係が考えられる。倉樹屯倉をもとに久良岐評(郡)などがなつたことは述べた。屯倉が評になる場合、郷(里、五十戸)の名に付くこともあつた。屯倉の経営をうけて複数の評が置かれた可能性は既に触れた。愛甲郡以下が相武国造のもとから分立したとすれば、国造からの系譜ということである。

つまり相模国などでは、王権が壬生や屯倉の設置以来、各地に拠点を定めて地域の首長に管理、支配を委ねたことに始まる地域性を大きな特徴と

して挙げる事ができる。王権とつながる国造の支配もこれに準じるといえる。七三五年の『相模国封戸租交易帳』にみえる相模国は皇族、貴族が封主となる郡が多いこともこれらに関連するかもしれないが、荒井氏が触れた通り、愛甲郡は生産性が高くなく、封戸が置かれなかつたとする点も見逃せない。

ほかの各氏が報告した国家形成期とそれ以降の事実については、それぞれが意義を有するのは当然であるが、同時に支配と社会の絡みという同じ視角でみることも可能だろう。

ともかく田尾氏の鮎河評の設置に関する解釈は、栗田氏の武蔵国南西部の説と並んで、郡が敷かれる前の段階に、評・五十戸制が制度化されたとするフラットな見方を超えて、各地の実態に即した見直しを促すに違いない。西川氏は、愛甲郡家以前の鮎河評家跡に擬されてきた御屋敷添遺跡を再検討し、新たに八世紀の郡庁に当たるような儀礼空間の存在を示唆したことも、無視できない点になる。ただ、討論では評家、郡家がどこにあつたにせよ、同遺跡では建物配置の規則性や倉庫の存在が認めがたいとする意見が多かつた。

Public Information  
あつぎ郷土博物館開館記念  
厚木市史シンポジウム

## 愛甲の古代を探る

事例報告発表を通して、飛鳥・奈良・平安時代の厚木周辺地域「愛甲」の様相を探るシンポジウムです。



豪族の地域支配  
古代相模の集落と生業・信仰  
古代相模の支配拠点の成立  
総括討論



愛名宮地遺跡出土遺物と瓦塔

入場無料

5月19日(日) 午前10時～午後6時  
厚木市文化会館 小ホール  
定員350人・申込み不要・直接会場へ  
問い合わせ 文化財保護課 ☎046-225-2509

シンポジウムのデジタルポスター



六世紀から十世紀にかけて、王権による豪族を介しての間接的支配だけでなく、その後の国家の農業中心の土地の班給（貸与）と生産物の供出を基準とする個別支配の厳しい制約のもとで、愛甲郡の人びとの生活、あるいは移住してきて開墾、生業に従うなどの際には、さまざまな葛藤、争いがしばしば起こったと考えてみたい。

#### 4 評設置前の地域の様相

柏木氏は六〜七世紀、古墳、横穴墓は厚木地域の依知をはじめ、伊勢原地域に大型古墳とその周りに小古墳が分布するのを指摘し、王権の外征との関連も考慮に入れた。厚木市を含む相模川流域



相模・南武蔵古代遺跡図 (高橋香氏作成)

における裝飾大刀や馬具をもつような首長、豪族身分の生成が認められ、その近くにはのちの官衙的施設があることを暗示した。

七世紀以後について、永井氏は、隣接郡の例も挙げて、物部などに見られる王権による部の設定と交通の関係性を特徴的であるとした。では七世紀の部廃止後の部の子孫たちはどういう生業に就いたのだろうか。かつて漆を取り木工に従事した漆部の出自の漆部伊波が相模国造になった有名な例を思い浮かべる。

#### 5 評・郡の支配拠点と郡司の集落

大村氏は八、九世紀、茅ヶ崎市の高座郡家が郡庁の正殿、厨など、正倉群のほか、郡の河津と河川、さらに祭祀跡、寺院跡を擁することを明確に述べた。神奈川県域では郡家域の空間構成が最もよく分かる有数の官衙遺跡群である。さらに海浜近くの居村には工房や祭祀跡、饗宴跡を示す木簡などもあつて、地域と郡家の関係がどうだったか、その後の時代ごとの変遷も考えさせる。

大上氏は七世紀後半以降に現れる海老名市本郷遺跡のような大規模な拠点集落は、首長（豪族）の居宅を包摂して、文献に高座、大住各郡の郡司として知られる壬生直氏のような豪族の存在を示唆した。壬生直氏が壬生部を率い壬生の経営を基礎にし、その後も王権の時から的人的コネクションを保ち、経済力を維持した姿を想像できよう。大型建物をもつ構造は有力豪族の私富の蓄積を思わせるが、ほかにどんな意義をもったのか。

#### 6 非農業の種々の生業

押木氏は、考古学から相模国の非農業生産、河海の水産業、繊維、染色、木工などの手工業に従

事した人びとの動きを指摘した。「相模工」（平城京木簡）の実在を裏づけ、五十戸の人びとの多様な生活内容を考えさせる。宮瀧氏の説く漁民、山民などにも通じる存在を析出したが、国家や郡は彼らをどう取り込んだのか。

#### 7 地域寺院の役割

高橋氏の瓦の文様からみた七世紀後半以後の愛甲など地域の寺院については、多くの問題が出された。瓦の生産、流通、供給と国家の労役システムとはどう関連するか。地域住民の信仰のネットワークは国境をこえるのか。国司と檀越の人格的関係でも瓦の供給はあるか。これらに国家制度との間に矛盾はないのか、などである。瓦だけでなく、仏教芸術の技術伝播も絡んでくる。郡家で地域行政に当たる郡司の支配を補完する拠点として機能した寺院のイデオロジカルな役割も考慮される。山林寺院についても、大山信仰のネットワークとの関わりがあるだろう。

#### 8 様々な人びと、都と地域の交流

日程の都合で紙上報告となった諸氏からも、示唆深い論点が提起された。宮瀧氏は、多様な生業に就く人びと、女、子供への眼差しの必須なことを強調した。

十川氏は、都から地方に下向する人以外に、上述の漆部伊波のように遠距離交易を機に都で活動して財をなし、相模国造に就けられた人、地方の出自で官人となる人に注意を喚起した。下総国海上郡の他田日奉部神護が都に出仕ののち、帰郷して郡司となった例もある。部の子孫は多様な生きかたをしたとみられる。国家によらない人とモノ、技術、情報の交流の問題にも広がる。



藤本氏は、都と地方の交流を都の官大寺で新しい仏教教義を身に付け、各地を遊行しながら布教した僧侶の動きに照明を当てた。愛甲の郡家推定地、寺院跡などは検出されていないが、拠点集落の仏堂や山林寺院での仏教は地域の住民にどう影響を及ぼしたのか。高橋氏のいう寺院、信仰のネットワークとの接点を探る必要がある。

## 9 文字文化と地域

小林氏は、相模国の各地の郡家跡や寺院跡に木簡、漆紙文書の出土例が多いことを挙げた。行政や寺院経営との関係にも着目した。文字の普及と以上以上文字文化の伝播が早い点は明らかであり、他方、呪的な文字、それも一字の墨書土器が集落跡で発見されることに触れた。厚木市域出土の墨書土器は、そくてん則天文字も含めて各地の一般的な傾向とみてよいか。

これらは上述した評家、郡家の形成期はもちろん、その後の律令制の地域行政とも関連があることが多いと推測される。地域のイノベーションを主導するのは国や郡に接触し、それを補佐する豪族であり、その周辺にいる住民である。人びとは郡家や付近の寺院に集い、催事や饗宴に加わるなどして寺院にかかわったのだらう。

『倭名類聚抄』の郡郷名は九三〇年代の編纂であり、八世紀初めの律令制による郡郷(里)の施行の時から変わらなかったとは言い切れない。郡郷の表記にも変化がある。



シンポジウム風景

愛甲郡の余戸あまるとを含む六郷についても、郡名の愛甲はもと鮎河あながわだっただろうし、船田ふねだは船木田が七一三年の好字二字表記令によって変わった。英那あきなはもと秋だった。東隣りの高座郡はもとと高倉と表記したことが知られる。表記の変更だけでなく、地域社会の統合上の変動、特に移住にともなう人口動態なども、住民の負担と絡ませて想定するべきだろう。

## 10 中世の新たな動き

以上のほか、もう一つの歴史の波頭は十世紀以後にある。松葉氏は、厚木市に隣接し一体的な状況を呈することの多い伊勢原市域の兵の時代、初期の中世武士の時期の最近の発掘調査から屋敷や寺院(仏堂)、鉄の工房を持つ例を明らかにした。国郡制とは異なる兵という身分の出現は、よく知られる粕屋氏や毛利氏につながる具体的な姿を彷彿とさせる。論は大山の山麓という立地にも及ぶ。各地の官衙遺跡に多く見られる国郡里(郷)の制度の停廃、変質に代わる新たな芽生えである。

### まとめと今後

要するに、私の理解では、この愛甲の古代のシンポを通して、①愛甲評(郡)が七世紀、相武国造の関与する「相武」評を立評したが、天武期以降、東に高倉評を一つ立て、西は大住、鮎河(愛甲)評の二つに分けたことに由来する確率が高いこと、②相模国、武蔵国南部には屯倉、壬生から評(郡)への変遷が多く認められるが、そのなかで愛甲郡は国造の「国」に始まるなどや異質であること、③愛甲郡には、ことに農業以外の水産、木工など、国家が支配の基準に置いた生業以外に従事する人びとを包摂したこと、④他方で寺院、

仏堂や仏教信仰など、都との僧侶その他の人々やモノの移動、伝播を介してほかの国郡と共通する文化、社会の様相も窺われることなどが提起された。これらには仮説的な部分があり、取り上げなかった問題もある。討論の時、田尾氏は愛甲郡家の遺跡の所在地として、大型建物や集落のある恩名、愛名、小野あたりに確率があるとした。なお評家、郡家の探索を進め、より活発な議論が求められる。

今後、愛甲の古代は厚木市域のみでなく、発掘成果の著しい伊勢原、秦野各市域の状況にも注目し、平塚、大磯、茅ヶ崎、川崎各市町域の国府、郡家、寺院跡の調査、研究に学びながら、より広い視野で史実を考えなければならぬ。現在、七世紀からの地域支配の政策、制度の実施、改革に関連する建物、道路の遺跡だけでなく、評、五十戸の木簡の研究も進んでいる。

かつて郡の成立には評の分割や合併があったとする米田雄介氏の論及(『郡司の研究』)があった。なかでも古代国家成立の過程で、郡以前に評の分割、変遷、新設などがあるとして、特に大和国飽波評の立評の場合を詳細に論じた狩野久氏の業績(『日本古代の国家と都城』)の先駆性、重要性があらためて思い起こされる。

このシンポジウムの成果が愛甲だけに限らない、真の地域史像、全体像の探究に寄与することを期待している。

### 厚木市史たより 第21号

令和元年9月1日発行

編集 厚木市教育委員会文化財保護課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町三・一七・一七

電話 〇四六・二二五・二〇六〇

FAX 〇四六・二二二・〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しています。